

会報

2006. 3.24

第42号

戦没船を記録する会

〒105-0014 東京都港区芝2-8-13 睦マンション206
Tel:03-3452-5085 FAX:03-3452-2711 郵便振替001606-719515
E-mail: senbotu@ric.hi-ho.ne.jp

目次

第12年度第2回理事会を開催	1
船員対策の根本的見直しを	1
第13回定期総会告示	1
第13年度活動方針案	2
第12年度活動報告	2
H Pまあまあの滑り出し	4
焼津市で資料収集	5
生まれる前に戦死した父	6
被曝52年目のピキニデー	6

第12年度第2回理事会を開催 活動方針案などを審議

3月4日午後、東京浜松町海員会館で本会の第12年度第2回理事会が開催され、正副会長ら役員、理事、監事16名が出席して、第13回定期総会の開催について審議した。

会議では会長を議長に選任、第13回定期総会を4月15日、東京芝の友愛会館会議室で開催することを決し、事務局提案の第12年度活動報告案、第13年度活動方針案等を審議し、一部修正のうえ総会議案とすることを決定した。

報告案では会員の高齢化により会員数と会費収入の減少が続いていること、同時にインターネットにホームページを開設したことでアクセスが増え、会員登録の申し込みがあったことも報告された。方針案では、引き続き戦没船・戦没船員関係の資料の収集・整備を進めること、独自のパネル展、共同・共催パネル展の開催、ホームページ掲載内容の充実、補強を図ること。会の活動強化のため、ホームページで会員募集を行うとともに、会費の改定(年会費3,000円1口以上)を提案することとしている。

一般会員が多数総会に参加されるよう期待している。

船員対策の根本的見直しを

石綿被害の申告始まる

今年2月3日に成立した通称アスベスト新法「石綿による健康被害の救済に関する法律」の施行(3月27日)を前に、20日から被害救済の申請が始まったと報じられている。

この法律は、労災法の適用を受けない住民や家族のアスベスト患者のうち、「中皮腫」と「肺がん」の患者及びその遺族が対象で、請求期限の5年を過ぎて労災認定を受けられなかった労働者や遺族も(労災)申請できることになっている。

救済の内容は、患者に対する医療費自己負担分

と療養費月10万円。遺族に対しては特別弔慰金300万円(含む葬祭料)で、今までの死亡者1万人、患者については今後40年間に10万人発症を予想して対象にするものだという。

しかしこの新法の対象者は中皮腫と肺がんに限定され、労災がアスベスト疾患と認定して救済の対象としている石綿肺やびまん性胸膜肥厚、良性石綿胸水の患者が除外されており、工場労働者と付近住民との格差が大きすぎるなどの不満があるほか、認定を受けるためのハードルが高すぎる、国や企業の責任があいまいになるなどの問題が指摘されている。

船員のアスベスト対策は、陸上から10年も遅れて、昨年「健康管理手帳」の制度が発足し、退職船員を含めた検診が実施されている。その手帳交付申請者数や手帳交付を受けた人数などが一部発表されているが、船員のアスベスト疾患の種類や年代別・職種別の罹患状況は明らかになっていない。

今まで船員のアスベスト対策は機関部が中心であったが、1960年代から90年代にかけて、毎年20~30万トンのアスベストが輸入されており、『袋物に梱包されていて、手鉤を使った荷役で袋が破れて、こぼれたアスベストを手ですくっていた』(海員05年12月号)という状況を考えると、船員に対するアスベスト対策を根本的に再検討する必要性が痛感される。

第13回定期総会告示

戦没船を記録する会会長 川島 裕
規約の定めに従い、下記により第13回定期総会を開催します。

記

日時	2006年4月15日 14時より
場所	友愛会館 9階会議室
議題	第12年度活動報告・決算報告 第13年度活動方針案・予算案 第7期役員選出 その他

以上

第13年度活動(案)

新年からの寒波と大雪の被害が全国的な広がりを見せたが、国民にとっては、自然災害だけでなく政府の増税や保険料・医療費の値上げなどで、痛みを強要されている。

昨年来のマンションの耐震強度偽装事件やライブドアの証券取引法違反事件、防衛庁の官製談合事件、米産牛肉の再度輸入禁止問題などは、まさに構造改革、民営化・規制緩和政策の申し子であるが、大企業の好景気の見返りは、リストラによる正社員の減少と、フリーターやパート・派遣など不安定雇用を増大させ、生活保護世帯100万戸、国民健保料未納所帯が470万戸という貧困と格差拡大をもたらしている。

一方、在日米軍基地の再編と日米軍事同盟の強化は、思いやり予算による基地の拡充整備や移転費用負担、米陸軍第1軍団司令部の座間への移転と陸上自衛隊中央即応集団司令部の新設をはじめ、米軍の訓練を全国に分散させるなど、全国の米軍基地の機能強化・恒久化と、自衛隊との一体化を目指すもので、日本をアジア太平洋から中東を含む広範な地域への、米軍の出撃基地化するためのものと見られている。

そのため、基地を抱えるすべての自治体や地域で反対運動が巻き起こっており、岩国市では岩国基地への米空母艦載機部隊の移転に反対して住民投票が行われ、87.4%の反対票が投じられた。しかし政府は、防衛問題は住民投票になじまないなどと、市民の意思を無視して、米国に追従する姿勢を示している。

これらは、新たな国家総動員法と言われ、有事法制として国民を管理・支配するための国民保護法や、憲法改正論議と合わせて、米国への従属を軍事的にも一段と強化するもので、靖国問題などとともに、アジア近隣諸国からの反発と孤立を一層強めることになることと心配されている。

これ等の状況から平和に対する脅威が増幅されており、海上の平和と安全を守り、再び戦没船を発生させないためのわれわれの運動は、一層重要性を増しており、引き続き努力を重ねていくこととする。

具体的には、次の諸点を中心に運動を進める。

- 1、戦没船・戦没船員に関する諸資料の収集・発掘、調査活動の充実。
- 2、収集した資料の展示会等独自展の開催。共同・共催展への参加。
- 3、インターネットの有効活用、ホームページの充実と有効活用。

4、収集資料の整理、必要なもののデータベース化と有効活用。

5、その他緊急的な必要事項。

組織強化と会費の改定

1、組織の拡大について

本会の会員構成は、発足当時から船員OBと海員、戦没船員遺族とその二世、海事関係者が中心であった。そのため年数の経過とともに高齢化などによる退会者が増加し、会員の減少が続いてきた。従って、組織の強化を図るためには、若い世代の協力を得て組織を強化する必要がある。

幸い、昨年の戦没船を記録する会のホームページ立上げ以来、これを通じてのアクセスが続いているので、ホームページ上に「会員募集」を広く呼びかけていくこととする。

2、会費の改定について

従来は戦没船・戦没船員に関係のある人たち中心の組織であったため、正会員は年会費額6,000円で、一般的に考えて高額であった。インターネットを通じて会員募集をするには、この会費は高すぎるので、今後は年会費「一口3,000円」とし、従来会員には一口以上の納入をお願いする事にしたい。

会員数が飛躍的に増加しないと会の運営に支障を来たすので、最大の努力を払うこととする。

第12年度活動報告

組織の状況

この年度末の会員数は正会員68人、賛助会員27人で、この年度にそれぞれ1名と2名の新加入があったが、郵便物が返送されるなど連絡不能の人が増え、会員が減少している。高齢化により子供たちと同居したり、施設に入ったりしたものと推測される。

またこの年度の会費納入は、正会員27人、賛助会員6人であり、例年3月に会費の約半数が納入されるが、今年度は賛助会員からの会費納入が極端に落ち込んでいる。

支出面では昨年度の「十年史」刊行のような事業支出がなかったことと、船舶通信士労働組合からの寄付金による「特別資金」が設けられ、戦没船、戦没船員の資料収集やインターネットの立上げ、パネル展の費用をこの会計から支出したため、一般会計の支出は軽減されている。

特別資金はこの1年でその半額を支出したが、その最大の支出先は戦没船員名簿、日本船名録、戦時徴用船名簿などのデータベース化の入力費用で、業者に支払い分約125万円、協力者等による自己入

力費約50万円、ホームページ立上げのための技術料約17万円。旅費交通費ではパネル展の旅費宿泊費約36万円(含む気仙沼展)、協力者の交通費雑費約25万円。パソコン2台と付属・関連機器や部品、ファクス機購入費など約25万円、資料提供者への謝礼23万円などである。

特別資金会計からの今後の支出として、日常の消耗品、資料収集、HP活用、PC入力などの経費が主で、業者発注の入力費用などの高額な支出予定はない。

理事会の開催

2005年10月27日、本会事務所に役員・理事15名が出席して、今年度第1回理事会を開催した。

活動報告では4月開催の定期総会で決定された活動方針の、海員組合との共催を目指した「戦後60年、資料館開設5周年記念事業」は、海員組合が他団体との記念事業は開催しない方針から不調に終わったこと。横浜・埼玉・静岡・焼津の「平和のための戦争展」への参加、戦没船・戦没船員関係資料のデータベース化の推進などが報告された。

また当面の活動として、広島市で開催される全日本海員組合定期全国大会で、本会のパネル展を開催すること。各種資料のデータベース化を続けること。インターネットに「ホームページ」を立ち上げることなどの方針が確認された。

2006年3月4日、東京浜松町海員会館で第2回理事会が開催され、役員・理事など17名が出席し、第13回定期総会の開催と、定期総会に提案する議案の審議を行った。

パネル展の開催

「平和のための戦争展 in よこはま」は5月27～29日の3日間、「かながわ県民ホール」で開催された。戦後60年の今年10回目を迎えた戦争展に、本会は当初から参加して来たが、今年は病院船として使われてきた東海汽船「橘丸」を加えた写真パネルや、戦没船のアルフォートを展示した。今年は特に、米軍機ファントムの墜落により犠牲になった土志田和枝さん母子3人の物語の朗読劇を、地元の中高生100人が演じて超満員の観客に感銘を与えた。そのため今年の入場者数は10年間で最高、場内アンケートも127通集まった。

「2005平和のための埼玉の戦争展」は7月28日から8月1日の5日間、浦和駅前の「コルソ」7階展示場で開かれ、期間中12,500人の入場者があった。

この戦争展は「武力によらない平和を目指して一見つけよう戦争以外の答え」をスローガンに開かれ、本会は戦没船・戦没船員関係の資料のデータベース化の中で得られた、本籍地が朝鮮・台湾の戦

没船員3,633名について、出身地域別船員数、年度別戦没者数のパネルや、朝鮮・台湾籍の戦没船員数の多い船船の写真などのパネル、アルフォトなどを作成・展示した。

この展示会にはパソコンを持ち込み、質問に答えて戦没船員の検索と、その戦没船のアルフォト写真をディスプレイに呼び出して見てもらうことが出来好評を得た。

焼津の「2005第6回平和のための戦争展」は、8月5～7日焼津公民館で開催された。

この展示会では繰り返してはならない焼津漁船徴用、3・1ビキニ水爆被災と第五福竜丸、戦争と子供たちの暮らし・市民の平和への願い、をテーマに漫画や写真を多用して視覚に訴える展示を中心にした。戦没船を記録する会は「朝鮮・台湾出身の船員の戦没状況」のパネル展示を行った。子ども向けアニメ映画「ぞうのいない動物園」や、映画「二十四の瞳」が上映され好評を博した。

会報の発行

日本船名録や戦没船員名簿のデータベース化などの作業もあって、会報の発行は3回にとどまった。第40号=2005年9月10日発行。第41号=2006年1月31日発行。第42号=2006年3月24日発行。

資料の整理、データベース化

(1) 日本船名録=昭和17年版、昭和20年版(各17,000隻)業者に発注PC入力、昭和18年版を自力でPC入力済み。チェック・整備済み。

3年度分を統合した名録を作成・整備、船名録の範囲内ではほぼ完了したが、欠落部分の補正が残されている。

(2) 戦没船員名簿=2/3を業者発注、1/3を自力でPC入力済み。チェック・整備続行中であるが、大量かつ確認の必要視される部分も多く、難航中である。

(3) 徴用船名簿=自力でPC入力、チェック・補正済み。統合船名録への記入開始。

(4) 戦没船明細=資料収集・整備、明細書の作成作業を継続中。

ホームページの開設

HP掲載物のPC入力を進めるとともに、HP自体の作成は業者に発注し、2005年12月8日に開設にこぎつけた。同時に光通信回線を導入した。

開設後も掲載資料の追加、更新の作業への努力を継続中である。

資料の補修、追記作成

アルフォトの破損分補充と新規追加作製の約100隻分を発注済み。

HP開設4カ月

まあまあの滑り出し

本会のHPは開設以来約4カ月になるが、徐々に掲載物を増やしており、本年1月以来のアクセス数は1日20件であり、この種HPとしてはまあまあではないかとのこと。

新たな掲載物

会報41号以降の掲載物は、

1、昭和17-18年版船籍港別船名録

戦没船の把握促進のための1資料として昭和17・18・22年版船名録(19~21年度版は緊迫化した戦時下で発行されなかった)を各年度版ごとにパソコン入力したが、大量であること及び活用上の有効性を考慮し統合化することとし、第1段階として17-18年版を統合化し、船籍港別に並べ替えて掲載した。

分量は、北海道地方=831隻、東北地方=1075隻、関東地方=2500隻、中部地方=1158隻、近畿地方=3185隻、中国地方=2488隻、四国地方=1302隻、九州地方=2157隻、朝鮮・台湾・関東州=2081隻で、A4版470頁分相当である。

2、太平洋戦争に関する証言・記録

本会会報に掲載されたものを順次掲載しており、8点(HP上で約30頁分)を掲載した。

掲示板の状況

多くのHPでは「ネット上の交流場」を設けており、よく見られる場となっている。

本会のHPはその場として「掲示板」を設けているが、次のような交流がなされている。

戦没船を記録する会(事務局)より 2005/12/8
掲示板を開設しました。

皆様の投稿をお待ちしています。

くりちさんより - 2005/12/14

HP開設おめでとうございます。

太平洋戦争では、船員さんや船が大変な犠牲を蒙ったようですが、その割には犠牲の公的記録があまり残され(公表され)ていないようですね。特殊部門であり、戦没した船員や船が海底深く沈んでしまっているので、物証がなく大変でしょうが、それだけに貴重なことだと思われまますので、頑張ってください。今まで収集・整理された資料も公表される由、期待しております。

菊池さんより - 2006/1/5

私は戦時中大同海運のタンカーや貨物船5隻で挺身、内4隻戦没(3隻は交替後に沈没)辛うじて最後の2A型向日丸(むかひまる)が生き残りました。

その体験から、かねて貴会のご活躍に注目し「知られざる戦没船の記録」を購入し、自社船の戦記収集にも活用しています。

ところで、このたび戦時喪失船舶明細表をホームページで公開された熱意に敬意を表しますとともに、下記2船の記録に疑問がありますのでご回報をお願いします。

1、18.10.14 高瑞丸の項

大同の社史では船員戦死者ゼロとなっていて、私の自分史「硝煙の海」にもそのように載せたところ、愛読者より「他の資料には戦死者あり」となっている、と忠告を受け、同船生存者に確認したところ、沈没後海軍に救出され佐世保に上陸。沈没は軍極秘とて少人数で旅館に分宿させられたので戦死者の有無は不詳とのことでした。

大同は他社と合併のため当時の記録無く、今般殉職船員顕彰会に問い合わせたところ、高瑞丸の記録無しと回答がありました。したがって私は会社の記録に信憑性ありと思いますが、貴会の戦死者資料の出所はどこでしょうか？

2、19.10.25 昭豊丸の項

この2E型タンカー爆沈時乗り組んでいた生き証人として、戦死者は船員1、警戒隊員1、計2名であると明言いたします。

この船の件も前記顕彰会に確認してみたところ、船員は比島1、台北1、ルソン島2、計4名の回答でした。私の記憶ではマニラで便船待ち中に暁部隊から船員4名徴発されたので、ルソン島の2名はこの船員では。また台北の1名は台湾の高雄で1名発病~陸軍病院に入院した船員かと推定されます。しかし社史には戦死5名となっているので疑問もあります。

前記の自分史は目下、下記ホームページで公開中ですので、何かにお役立ていただければ幸いです。

事務局より菊池さん - 2006/1/7

ご連絡いただき有難うございました。

ご連絡の「戦時喪失船舶明細表」の件

1、資料の出所

「戦時船舶史」(駒宮真七郎著)、「戦時輸送船団史」(駒宮真七郎著)を基準資料とし、その他「知られざる戦没船の記録」(戦没船を記録する会編)掲載の諸資料を参考にしております。

2、高瑞丸の戦没船員数

前記「明細表」は作成当時、前記駒宮著の2資料に「3名」(船の戦没時か否かは不明)と記されており、それを否定する資料もなかったため、そのまま引用したものです。今回改めて確認努力をしましたが、肯定・否定共に確証は得られませんでした。

した。貴殿の調査を「正」とせざるを得ないと思われます。

3、高瑞丸の戦没地点

軍の現地報告により、「27 -35N 127 -30E」が確認されております。

4、昭豊丸の戦没者

「戦没船員名簿」によりますと、同船戦没者として下記4名が記載されております。貴殿ご指摘の通り、A氏が昭豊丸戦没時に船と運命を共にし、B氏は台湾で陸軍病院に入院、C・Dの両氏はマニラで暁部隊に徴発され、その後の経緯は不明ですが、下記のとおり戦没に至ったと思われます。

- ・A氏 T14.10.15生、本籍 = 島根県浜田市治和、甲板部、19.10.25比島で戦没、BC船扱い。
- ・B氏 不詳、本籍 = 朝鮮慶尚北道醴泉郡、機関部、20.06.28台北で戦没、A船扱い。
- ・C氏 不詳、本籍 = 徳島県那賀郡坂野町、甲板部、20.07.28ルソン島で戦没、A船扱い。
- ・D氏 不詳、本籍 = 兵庫県赤穂郡赤穂町、甲板部、20.07.28ルソン島で戦没、A船扱い。

菊池さんより - 2006/1/7

早速のご回報ありがとうございます。

1について= 私も同じ文献を活用してはいずれもご労作と思います。

2について= 大同海運には戦時喪失船の一覧表だけで個々の船の戦史は見当たりませんでした。ジャパラインになってからの記録が見つかりましたので、拙HP第二部に掲載。

高瑞丸戦没記録の吉田機関士と接触した経緯は本照会文に記したのですが、同氏は残念ながら昨年逝去されたようです。

3については、そのとうりと思います。

4について、詳細情報を謝します。

西本さんより - 2006/1/12

レイバーネット日本のサイトで「戦没船を記録する会」hpを知りました。

現在アップされている会報を全て読ませただき、貴会の活動がよくわかりました。会報の「遭難記」やパネル展で肉親の戦死状況を質問されるご遺族の姿には、胸がいっぱいになり、悲惨な戦争の記録を残すことの大切さをしみじみ感じます。

資料ページに「証言」や「記録集」も掲載される予定との事なので、戦没船の実態をもっと詳しく知ることができそうです。若い人達にも戦争の悲惨さを理解してもらえる資料になることでしょう。

今年は「戦争と平和展」に行つて、貴会のパネル展を参観したいと思います。

長原さんより - 2006/1/16

「戦没船を記録する会」のHP見ました。

海図を埋め尽くす戦没船の数々、戦没者数など戦争の悲惨さが生々しく蘇ってきます。この愚かさを二度と繰り返さないために、この事業の進展を節に期待し祈ります。

先の長い作業ですが頑張ってください。

yaharaさんより - 2006/1/24

会報38～40号の申し込み方法について問い合わせた者です。よくわからないソフトを入れたくないので問い合わせさせていただいたのですが、会報は印刷物の形をとっていないのでしょうか？お返事をいただけますようお願いいたします。

金野さんより - 2006/1/25

帝国船舶所属の帝瑞丸は何時、何処で戦没し、犠牲者等の有無などご回報ください。

事務局より金野さんへ - 2006/1/30

帝瑞丸は「S 20.4.18、関門吉見沖にて触雷・沈没」との記録が残されているのみで犠牲者については不明です。

本間さんより - 2006/3/2

戦没船のHPも、時々拝見しておりますが、少しずつ中身が増えていって、やはりこうあるべきと思いました。引き続きがんばってください。

事務局より - 2006/3/7

当方のE-mail不調で、連絡不行届きの向きがあり申し訳ありませんでした。

yaharaさんからはその後郵送先の連絡があり、会報を郵送しました。

焼津市で資料収集 期待感促す多くの資料

2月28日、焼津市において静岡県近代史研究者らと面談、焼津漁船の戦後60年をめぐって第2清正丸の軌跡一等の資料を戴き、本会からは戦時中の湾糖還送作戦記録 南西諸島還送作戦記録 静岡県船名録 同市町村別船舶数表 静岡県戦没船員名簿 同市町村別戦没船員数表一等を提供した。

その後図書館・和船研究所を訪れたが、同市では10年来の研究成果の1つとして、昨年「焼津市史(漁業編)」を発刊された由、太平洋戦争当時の記録も多く含まれており、全国的にはこの種記録の少ない中で注目に値するものであった。

和船研究所では、第5福竜丸を初め70隻を超える和船模型、その他漁業関係器具や資料が展示されており、漁業博物館の様相を呈していた。

焼津市は漁業の町として、戦没漁船・船員に関する研究も進んでいるが、他地域にも似通ったものがあるものと思われ、今後の資料集めに期待感を促すものがあつた。(K)

船内の状況を知りたくて

生まれる前に戦死した父

10年前に1度尋ねてきたことがあるとあって、片岡さんが尋ねてきた。そのときは、亡くなったお父さんの戦死した船のことを知りたくて、話を聞いたり、戦時船舶史や戦時輸送船団史のコピーをもらって帰り、乗船していた船や戦没した場所はわかっていて、今度もその時の資料を持ってこられた。

片岡さんのお父さんは昭和19年11月10日、レイテ攻防戦のための兵員1万名を輸送する「モモ05」船団11隻の中の「広明丸 - 2,857総トン」に、775名の部隊の1員として3,500立米の隊貨とともに呉で乗船、門司から基隆を経てマニラに向かったが、船団は途中たびたび敵機や敵潜水艦の攻撃を受け4隻が失われた。広明丸もマニラ入港前日の10月31日被雷、船尾から逆立ち状で沈没、部隊346名、警戒隊3名、船員10名が戦死した。部隊の半数近くが戦死したのは、航海中寝起きしていた船艙から脱出するのが困難だったからなのかもしれない。

その結果、「モモ05」船団は11隻中5隻が戦没し、記録を集計すると7,000名の将兵が失われ、『時あたかもレイテ攻防戦の開戦期と重なり、戦力投入が叫ばれている最中、大被害を被った当船団の揚陸兵力がそのまま充用されるはずはなく、建て直しにかなり苦慮されたと思う』と戦時輸送船団史に記されている。

片岡さんのお父さんは出征して僅か4カ月で戦死して、片岡さんはまだ生まれていなかったのだという。最近になって再び、お父さんのことを調べているが、輸送船の船内でどのような生活を送っていたのか知りたいと訪ねてこられた。

本会には船が魚雷や空爆で攻撃され、それどのように戦い、どういう状況で助かったか、あるいは戦没したか、という記録はたくさんあるが、兵隊を輸送するときの貨物船の船内設備とか、乗ってきた兵隊の船内生活状況などの記録はあまり見たことがない。そこで片岡さんには、「海なお深く」などの中の、乗組員以外の人の書いた船内生活記録のようなものを見てもらい、必要な分をコピーしてもらった。

片岡さんはお父さんの部隊のことを調べるため、防衛庁にも行ってきたそうだ。そこで、「この部隊は役に立たない部隊だった」と言われたと憤慨していた。レイテ攻防戦に派遣した部隊が途中で沈めら

れたため、役に立たない部隊だと言ったのだろうか。

『どんな精鋭部隊でも、船が沈められて武器弾薬も食料も失えば、丸裸の兵隊がいくら生き残っても、軍隊としては何の役にも立たない。戦没船員は6万人だけれど、船と一緒に沈んだ兵隊さんは20万人とも30万人とも言われている。乗っている人の責任ではなく、それを守れなかった軍の責任ではないか』と話したら、少しは気が楽になったようだった。

防衛庁は今でも、乗組員や乗ってきた兵隊たちが頑張れば、輸送船が沈められなかったとでも思っているのだろうか。(S)

被曝52年目のピキニデー

第五福竜丸がピキニ環礁で被曝して52年目の3月1日、焼津市で「ピキニデー集会」が開かれ、全国から1,500名が参加した。本会の会員を含む船員OBなど「海の平和問題懇談会」の13人も、前日の全国集会や分科会に参加し、当日の久保山さんの墓参り進や焼津文化センターでのピキニデー集会に参加した。

この集会では第五福竜丸の大石又七さんと、はじめて参加した高知県の第2幸生丸の乗組員桑野浩さんが、被曝の経験やその後の経過などを報告した。

大石さんは特に、第五福竜丸乗組員の死亡者12名のうち4人に、船員保険の遺族年金支給が決定されたことは、今日までの運動の成果としつつも、政府は第五福竜丸の乗組員が核実験の放射能被曝者と認めているわけではない、全員が大量の輸血を受けたが、C型肝炎が発見されたのは1988年で、それ以前に死んだ人や死亡診断書にC型肝炎と書かれなかった人の遺族に年金が支給されないのは絶対納得できないと語った。

桑野さんは、ピキニ水爆実験で被曝した高知県の漁船は276隻で、第2幸生丸が入港したら、待ち構えていた検査員が船体や持ち帰った鮪の1本ずつにガイガーカウンターを当てて、汚染数値の高い鮪と低いのを選り分け(高いのは廃棄)たが、乗組員には誰にも一度もガイガーカウンターを向けなかったと、怒りをこめて語っていた。

今年のピキニデーでは、在日米軍の再編強化に絡んで、全国各地の基地強化に反対する運動が活発化していて、各グループがそれぞれの状況と、反核・反戦・平和を訴えたのが特徴的であった。(S)

【お断り】

活動報告に決算報告書がありませんが、会計年度が4月から3月までとなっているため、合計報告は次号掲載となります。ご了承ください。(事務局)